

アドルノの第一哲学批判とその帰結

言語運用の観点から

守博紀

誰かが誰かに知識を伝達するとき、そこでは何が起きており、どのように言語が用いられているのか。これが、本稿が出発点とする問いである。私はこの問いを考えるための手がかりをアドルノの思考に求める。私の考えでは、アドルノの認識論に対する問題意識は言語運用に対する問題意識と独特なしかたで絡まりあっている。そこで、まずはこの絡まりあいを示すことが本稿の第一の課題となる。これを示したのち、私は認識論にかんするアドルノの洞察から言語運用にかんするひとつの帰結を引き出したい。これが第二の課題である。

本稿の意義について言えば、本稿は、現代認識論への直接の

理論的貢献を目指すのではなく、アドルノ研究内部での限定的な解釈的貢献を目指すものである。ここで限定的というのは、本稿は、アドルノの著作全体を見渡すものではなく、また、これまでのアドルノ研究に批判的な検討を加えるということよりも、これらの研究を踏まえつつより生産的なアドルノ解釈を提示するということを目的とするからである。ここで生産的というときの眼目は、具体的には、認識論と言語運用の連関という問題をアドルノ解釈から得られるひとつの重要な論点として取り出すことによって、認識論の問題と言語論の問題がいかなる点で不可分なのかということを示すという点にある。この

ことがうまくいくならば、本稿は、現代認識論において周縁化されている問題を位置づけなおすことによって、現代認識論にも間接的に貢献することができるだろう。

議論は以下のように進められる。まずは、第一の課題への導入として、アドルノの認識論理解を確認する。次に、アドルノの認識論上の問題意識が「第一哲学」と呼ばれる考え方への批判と結びついていることを示し、この第一哲学がどのようなものであるかを明らかにする(第一の課題)。最後に、第一哲学的思考の矯正策としてアドルノが提示する考え方を検討し、そこから、主張と論証の提示という言語運用上の事柄にかんするひとつの帰結を引き出す(第二の課題)。

一 認識論と言語運用の問題の導入

アドルノは認識論をどのように理解していたのか。その答えを知る手がかりとなる発言を、『認識論のメタ批判』の「緒論」から引用する。「認識論は、第一のものの概念からけっして切り離すことのできない主観への反省によって、絶対的に第一のものを絶対的に確実なものへと高めようとしていた。しかし、そのような反省を進めていくなかで同時に同一性の強制が強くなる」(5, 80)⁽¹⁾。最初の発言は、伝統的な認識論の標準的な

捉え方を示していると言ってよい。後の方の発言が、アドルノの認識論に対する問題意識を端的に示している。以下でこのことを説明する。

まず、最初の発言について。ここからは認識論にかんして三つの重要な論点を読みとることができる。(一)第一のものを確実なものへと高めることが認識論の課題であること。(二)第一のものの概念と切り離せないような主観が考えられていること。(三)このような主観のあり方を反省することが認識論の課題を果たすための手段であること。順番に説明しよう。

(一)そもそも「第一のもの」とは何なのか。認識論の文脈でそれを理解するためには、伝統的な認識論の課題設定を理解する必要がある⁽²⁾。伝統的な認識論は、知識とは何かを問う。この問いには、知識をそうではないものから区別する、という課題が含まれる。この課題が取り組むに値する課題であるのは、「あることを知っている」という一見したところごくありふれているように思われる状態が、よく考えてみると知っていると断言できないような状態である、ということが起こりえるからだ。それでは、知識とそうでないものとはどのようにして区別されるのだろうか。このときにもち出されるひとつの論点は、知識の候補となりうる信念が正当化されているか、ということである。ここで、「ある信念が正当化されている」とは、「なぜその

信念をもって「いるのか」と聞かれたときに理由を挙げて答えられる、ということの意味する。挙げられた理由についてもなぜそう思うのかを問われうるので、この理由がもともとの信念の理由でありうるためには、この理由もまた正当化されていなければならぬ。こうして正当化の連鎖が生じる。「第一のもの」とは、この信念の正当化の連鎖上で先端に位置するもの、すなわち、ほかの信念によって正当化されているわけではないがほかの信念を正当化することのできるものことである（一番はじめにほかの信念を正当化するので「第一のもの」と言われる）。

しかし、ほかの信念によって正当化されているわけではないものがほかの信念を正当化することができる、とはつまりどのような事態なのか。ひとつの選択肢として、この事態は次のように捉えられうる——私たちが知識と呼んでいるものは結局のところ、それ自体としては正当化されていない（無根拠な）信念によって支えられているにすぎない。これは懐疑論的な見方である。そこで、もし懐疑論を拒絶する認識論的立場を取るならば、第一のものがほかの信念を正当化できるうえにそれ自体はほかの信念によって正当化される必要もないものである（すなわち、アドルノの発言にあるように「絶対的に確実なもの」である）、ということを示さなければならぬ。それゆえ、「絶

対的に第一のものを絶対的に確実なものへと高め」ることとは、懐疑論論駁という認識論の課題を表しているのである。

(二) この課題を達成するためには、ほかの信念によって正当化されなくともほかの信念を正当化することができるものとはどのようなものか、すなわち第一のものの概念の内実は何かという問題に答えなければならない。この問題に対して、伝統的な認識論は、外界にあるものではなく心のなかにあるとされるものを調べることで答えようとしてきた。外界については錯覚などの原因により誤った信念をもちやすいが心のなかについては（少なくとも外界よりは）そうではない、と考えられたのである。アドルノの発言にある「第一のものの概念からけっして切り離すことのできない主観」とは、ここで想定されているような心のなかのことである。(三) それゆえ、そのような主観のあり方について考えること、すなわち「主観への反省」が、認識論の課題を果たすために必要とされるのだ³。

そうすると、次の「そのような反省を進めていくなかで同時に同一性の強制が強くなる」という発言はどのような問題意識を表していると考えられるだろうか。ここでアドルノが意図しているのは、認識論の伝統的な問題設定の内部で（たとえば「ほんとうの第一のものは何か」といったことを問題にする）論争に加わることはない⁴。そうではなく、アドルノはこの

ような問題設定のもとで営まれる思考がもたらす副産物（ここで「同一性の強制 Identitätszwang」と呼ばれているもの）を問題にしている。しかし、この発言からだけでは「同一性の強制」が何かはわからない。そこで、次節では、アドルノが「哲学の疑いなく確かな出発点として絶対的な第一のものを選び出すこと」(S.13)と規定する「第一哲学」のあり方を考察する。それによって、この同一性の強制という副産物とは何か、そしてそれはどのような文脈で問題となるのか、ということを明らかにするのが次節の目標である。

二 第一哲学の身振り

第一哲学とは何か、そしてそれはどのような文脈で問題になるのか。これが本節の問いである。ここで私は、第一哲学の問題をよりイメージしやすくするために、ひとつの補助線を引いておきたい。それは、川上未映子の小説『乳と卵』の一場面に出てくる会話である。

この会話は主人公である「わたし」が昔の場景を思い出すという体裁で描かれている。この場面は「胸おおきくしたいわあ」とある女の子が⁵「発言するところから始まる。それに対してその場にいたもうひとりの女子が、「え、でもそれってさ、結

局男のために大きくしたいってそういうことなんじゃないの」と、「冷っとした口調で」「ネガティブな言いを」する。この発言に対して前者（「胸派女子」と呼ばれる）は、「そういうことじゃなくて胸は自分の胸なんだし、男は関係なしに〔……〕これは自分自身の問題なのよね」と答える。この応答に対して後者（「冷り女子」と呼ばれる）は、「その胸が大きくなければいいなあっていうあなたの素朴な価値観がそもそも世界にはびこるそれはもうわたしたちが物を考えるための前提であるといってもいいくらいの男性的精神を経由した産物ではないのよね実際、あなたは気がついてないだけで」と再応答する。この「冷り女子」の再応答を「わたし」は「なんだかもっともらしいこと」と感じる。さらにこの再応答に対して、「胸派女子」は「なんだって単純なこのこれこについてる私の胸を私が大きくしたいっていうこの単純な願望をなんでそんな見たことも触ったこともない男性精神とかってもんになんかわざわざ結びつけようとするわけ？」と返し、さらに、「わたしのこの今の小さい胸にわたし自身不満があること、そして大きな胸に憧れるようなものがあることは最初から最後まであたしの問題だ」と返す。前者にとってこの問題は「べったんでまったいらなこれになぜだか残念を感じてしまうだけのこと」以上のものではないというのだが、それに対して「冷り女子」は次のように返す。「だ

からその残念に思う気持ちこそがそもそもすっかり取り込まれてんのよ、その感慨を、その愁嘆を、そういう自分自身の欲望の出自を疑いもせずに胸が大きくなったらいいなあ！ なんてほんやりうっかり発言したりするのが不用意極まりないっていうか、腹立たしいっていうか無知というかなんていうかさ。」

この会話はもう少し続くのだが、本稿で扱う問いにとってはこちらまで十分である。どちらの言い分に理があるか、ということは本題ではない。本題は、この場面で「冷り女子」はそもそも何をしているのか、ということにある。なぜ「冷り女子」の発言が「わたし」には「もっともらしいこと」に聞こえたのか、そしてなぜ「冷り女子」は相手の無知をあげつらうような態度を取っているのか。こうした論点を考えることは、アドルノの第一哲学批判の理解につながる。以下ではこの会話を補助線としつつ、アドルノが問題にしている第一哲学の身振りを明らかにする。

二・一 本質と仮象の区別

この「第一哲学の身振り」が何を意味するのかを明確にするために、アドルノの次の発言を最初の手がかりとしたい。「本質と仮象の強調した意味での区別は第一哲学の大きな発見であるが、硬化し自分自身から疎外された生が生自身の矯正策とし

てこの本質と仮象の区別をいかに必要としているとしても、この区別には同時に、「私は知っているが君たちは知らないのだ」という側面がある」(5.36)。この発言では三つのことが同時に言われている。(一)「本質と仮象の区別」が第一哲学のひとつの特徴であるということ。(二)「硬化し自分自身から疎外された生」はこの区別を必要としているということ。(三)この区別には同時に知識所有者と非所有者とのあいだの非対称性を強調するような側面があるということ。順番に説明しよう。

(一) 本質と仮象の区別は同じひとつの出来事や事柄に対して適用される。このとき、仮象は感覚的事物や知覚可能な現象、本質はその正体と言い換えてもよい。それはすなわち、ある事柄について本質と仮象の区別を適用したときの言い方は、一般的に「仮象Sの正体は実は本質Wだ」というかたちになる、ということだ(「冷り女子」は「胸派女子」の願望の正体を「男性的精神を経由した産物」だと主張した)。先に引用したように、アドルノにとって第一哲学とは「哲学の疑いなく確かな出発点として絶対的な第一のものを選び出すこと」であった。そして、この本質と仮象の区別によって、「第一のものという概念そのものを〔……〕同一性の定立という意味で使用すること」(5.15)が可能になる(「同一性の定立 *Setzung von Identität*」とは簡単には、AとBを同じものと見なすということ)

ある)。それゆえ、本質と仮象の区別は第一哲学の基本的な特徴であると言える。

(二) 正体をつきとめることはそれ自体問題になるようなことではない。それどころか、「硬化し自分自身から疎外された生」、すなわち、自分のあずかり知らぬところで成立した既成の考え方に囚われた生にとっては、自らのあり方を反省するために、自分の考え方や欲望の正体を理解していた方がよい(「冷り女子」は「自分自身の欲望の出自を疑」うことを要求している)。それゆえ、正体を認識するということはむしろ望ましいとさえ言える。

(三) しかし、それ自体としては問題にならない正体つきとめは、立場の優劣や権力の有無がそれに基づいて示されるような知識という形態をとる場合がある。これは、仮象を感覚的事物とし、本質を感覚では捉えられない(あるいは、仮象よりも捉えにくい)ものとすることの区別に内在的なことである。この区別はつねに、本質の方が仮象よりも認識困難であるということ、認識のために何らかの熟練(感覚を疑う、推論を形式化しその妥当性を確認する、顕微鏡のような科学的器具の使用法を習得するなど)が必要であるということを含意している。すなわち、本質についての知識をもっていとされる人は、その知識をもっていないとされる人に対して、この構造ゆえに優位な立場に

立つことになるのである。実際、このことが、なぜ「冷り女子」が相手の無知をあげつらうような言い方をし(「あなたは気がついてないだけで」、冷静に「もっともらしい」意見を返しているにもかかわらず相手に腹立たしさを感じているのか(「腹立たしいっていか無知というかなんていうかさ」)を説明している。

まとめよう。ある知識をもっているということは、自分や他人の考え方の歪みを正してくれるという点で解放的な性格を示す場合と、その知識の独占的所有が誇示されそれに基づいて立場の優劣が一方的に主張されるといふ点で抑圧的な性格を示す場合とがありうる。さらに、知識の二つの側面はともに本質と仮象の区別という同一の水準で問題になる。すなわち、同一水準で問題になるがゆえに、知識の解放的側面と抑圧的側面は単純には切り離せない。単純には切り離せないということを確認したうえで、本稿では、知識の抑圧的側面を強調する身振り(「冷り女子」の身振り)を第一哲学の身振りと呼ぶ。

二・二 連続性と完全性の追求

しかし、単純には切り離せないということを確認するだけでは不十分である。知識の抑圧的側面が強調される文脈をさらに明確にする必要がある。そのための作業として、なぜ「冷り女

「子」のいうことが「わたし」には「もっともらしいこと」に聞こえたのか、ということを考えよう。ひとつの仮説として考えられるのは、このもっともらしきは「男性的精神」による説明の形式的に由来する、ということだ。「胸派女子」がいくら「男性的精神を経由した産物」とは思えない自分の感覚に訴えても、「冷り女子」は、「あなたは気がついていないだけ」なのだからそのように言うのだ、というかたちで自分の説明からその感覚を捨象することができる。すなわち、「男性的精神」による説明は「胸派女子」が何を言おうとも成立するのであって、この意味でそれは形式的である。

アドルノもまた「第一哲学の必然的に形式的であらざるをえない性格」(5, 43)を指摘する。ここで考えたいのは、このような形式的(一定の型に則って説明するというやり方)はどのような場面で威力を発揮するか、ということだ。

この問題を考えるために、ここで第一哲学についてのアドルノの発言をもう一つ引用しよう。「第一哲学は、連続性と完全性を貫徹するというただそれだけのために、自らがそれについて判断しているものなかでうまく収まらないものをすべて切り離さなければならぬ」(5, 18)。「連続性 Kontinuität」ということでアドルノが考えているのは数列の連続性であり、「完全性 Vollständigkeit」とは数列のように順序に従って論点

が枚挙し尽くされているということである。これは、たとえば論証の場面では、論理の飛躍がなく(連続性)論拠がすべて挙げられている(完全性)、というかたちで考えることができる。そして、ここで重要なのは、この連続性と完全性もまた説明を形式的にすることに寄与し(なぜならそれはアドルノが言うように「うまく収まらないものをすべて切り離さなければならぬ」)からである。(本稿ではしかじかの問題は扱わないことにする)といった言い回しにその具体例を見ることができ、その点で説明をもっともらしくするという目的に役立つということだ。

論理の飛躍も論点の取りこぼしもないということが説明の形式化につながる、という主張は誇張のように思われるかもしれない。私がかここで主張したいのは、連続性と完全性の追求が望ましくないということではなく、連続性と完全性という議論をするうえで基本的とされる要素にも第一哲学の身振りが潜んでいる、ということである。それはたとえば、論文などでおなじみの(結論はしかじかである。その根拠は三つある。第一に……)という型に見られる。ある主張がこうした型に則って提示されているからといって、そのことのみによってその主張の正しさが保証されるわけではない。このような型は知識の受け手側の負担を減らす役割を果たすのである。受け手側の負担を

減らすことには、知識を情報として効率よく伝達するためという以上の理由はない。それゆえ、こうした型は知識の獲得ではなく知識の伝達という場面で問題になる。

そして、連続性と完全性の貫徹という第一哲学の性格は、この伝達という場面で本質と仮象の区別という論点と交差する。なぜなら、知識の伝達とは知識所有者が非所有者に対して行う営みであり、そして、前節で確認したように、本質と仮象の区別には、知識所有者と非所有者とのあいだの非対称性を強調するという側面があるからである。

知識の効率的な伝達にもなされる形式性に対するアドルノの疑いは次の発言に見られる。「知恵というものは、それが問題含みになればなるほど、ますます倦むことなくみずからの厳密さを強調せざるをえなくなる。そして、そのために有効なのが首尾一貫した論理である。この首尾一貫した論理のおかげで、対象の経験を度外視して、すなわち「形式的に」、そしてそれゆえに抵抗できないしかたで、思考の強制 *Denkzwang* を行使することができるようになる」(536)。首尾一貫性は問題含みな知識をもっともらしく伝達するために役立つ、というこのような考え方は論理についての誇張された意見だと私は思う。しかし、誇張だからというだけでは切り捨てられない洞察がこの発言には含まれているとも私は考える。それは、知識伝達の

形式性に潜む抑圧的性格に対する洞察である。実際、「冷り女子」は「胸派女子」の感覚を考慮することなく(すなわち「対象の経験を度外視して」)自分の意見を押し通そうとしており、そうした主張の方が「わたし」には「もっともらしいこと」に思えたのである。

まとめよう。連続性と完全性の追求は、自らの主張を整合的に提示するための基本的な身振りであるが、知識の伝達という目的のために洗練された型には有無を言わさぬ強制力が備わる。そして、この形式上の強制力のゆえに知識が効率よく流通するとき、知識の抑圧的側面が問題になる。

三 第一哲学批判から文体論へ

ここまでの議論から何が言えるだろうか。まず、本質と仮象の区別という論点で重要なのは、知識の抑圧的側面と解放的側面を単純に切り離すことはできないということである。すなわち、本質と仮象の区別を放棄するという話にはならない。さらに、連続性と完全性という論点で重要なのは、知識の抑圧的側面は伝達という文脈で強調されるということだ。そうすると、これら二つの論点を合わせて、一方で本質と仮象の区別を保持しつつ、他方で伝達のために効率化された言語運用を拒絶する、

という身振りだが、第一哲学の身振りにたいする矯正策として考
えられることになる。

この矯正策の内実を明らかにするのが本節の課題である。そ
のために本節では、『ミニマ・モラリア』のなかのいくつかの
発言を検討する。その検討を通して、私は、本稿の第二の課題
である言語運用上のひとつの帰結をアドルノの思考から引き出
したい。

三・一 本質と仮象の区別の保持

まずは、本質と仮象の区別の保持にかかわる発言から検討し
よう。

弁証法的思考は、個別的なものをそのつどの個別化および切
り離されたあり方のなかで確認することを拒否する。その意
味でもまた、弁証法的思考は物象化に逆らう。弁証法的思考
はまさにこの個別化を普遍的なものの産物として規定するの
だ。それゆえ、弁証法的思考は、熱狂的な固着性に対しても、
絶対的判断を手に入れるために事柄の経験を犠牲にする偏執
症的精神の抵抗を受けることのない空虚さに対しても、矯正
策として作用する。(4.80)

ここで問題となるのは、本質と仮象の区別がどのように保持
されているかということだ。ここでもやはり川上の小説の場面
を補助線にするとわかりやすい。まず、「個別的なもの」の
Einzelnesをそのつどの個別化 *Verinselung* および切り離され
たあり方のなかで確認すること」とは、「胸派女子」の願望を、
本人が主張しているように「最初から最後まであたしの問題」
と捉えることである。それを拒否するというのであるから、こ
こで弁証法的思考と言われている考え方は、この点では「冷り
女子」の考え方に近い。すなわち、弁証法的思考は「熱狂的な
固着性 *die manische Fixiertheit*」に対する矯正策になる。

しかし、「冷り女子」は「胸派女子」の願望をそのまま「男
性的精神の産物」と同一視しているが、弁証法的思考はこの点
で「冷り女子」の考え方から距離を取る。ここで重要になるの
は、弁証法的思考が「普遍的なものの産物 *Produkt des Allge-
meinen*」として規定する対象は、アドルノの発言では「個別
的なもの」ではなく「個別化」になっている、ということであ
る。

「個別的なもの」がひとつひとつの事実や感覚であるとすれば、
「個別化」とはそういった個別的なものがひとつの個別的なもの
のとして捉えられるようになるという事態を表している。すな
わち、「個別化を普遍的なものの産物として規定する」という

ことは、「胸派女子」の願望だけを取出して問題にするということではなく、「胸派女子」が自分の願望を「最初から最後まであたしの問題」と考えているという事態を問題にするということだ。

そうすると、弁証法的思考と呼ばれる思考のあり方は、「胸派女子」の願望を「男性的精神」から説明するという上から下へのやり方を取るのではない、ということになる。そうではなく、弁証法的思考は、「胸派女子」がいかにしてその願望をもつようになったか、いかにしてその願望を自分自身の問題と捉えるようになったか、という本人のこれまでの経緯にそくした考察に徹し、その結果として個別的なものと思われた感覚や欲求が個別的ではないようなあり方で見えてくる、というやり方を取るのである。より限定して言えば、これは、「胸派女子」が「まったいらなこれになぜだか残念を感じてしまうだけのこと」と言って片づけてしまう事態の前で立ち止まって、その「なぜ」の理由を（あなたは気がついてないだけで」という上からの図式的な説明に終始することなく）あくまで本人の経験にそくして考える、ということだ。それゆえ、弁証法的思考は「偏執症的精神 der paranoide Geist」に対する矯正策にもなる。まとめよう。本質と仮象の区別が必要とされるのは、前節で確認したように、既成の考えに囚われた生を解放するためであ

った。しかし、既成の考え方を所与の前提としてしまうと、本質と仮象を区別するということは、（あなたの考え方は結局しかじかの既成の考え方とおなじだ」ということを確認する作業にすぎなくなってしまう。このとき、本質と仮象の区別は抑圧的側面を示すのであった。こうした事態を避けるためには、既成の考え方を所与の前提とするのではなく、あるあり方をした生がまさにそうしたあり方で個別の生として捉えられるようになるのはいかにしてか、ということとそのつどの生のあり方にそくして問わなければならない。このように問うとき、もはやその目標は、より一般的な概念で特殊なものを包摂して説明する、ということではない。むしろ、包摂による説明を避けることが、個別的なものがただ個別的であるだけではないということとを理解するためには必要である。

三・二 伝達のために効率化された言語運用の拒絶

包摂による説明を避けることができる。このような考え方は、アドルノの次の発言に見て取ることができる。「認識が拡大できるのは、認識が個別的なものにとどまり、そうして固執しているうちに個別的なものの孤立したあり方が崩壊する、そのような場合のみである。もちろん、このことは普遍的なものとのある関係を前提にしている。しかし、その関係は包摂の関係

ではなく、ほとんどその反対の関係である(488)。このような観点からすると、個別的なものについて正しい認識を獲得することははや重要ではない。それよりも重要なのは、個別なものについて正しいとされる認識がなぜ正しいと認められるのか、正しいとされる認識の対象となることで当の個別的なものが実際にどのように扱われることになるのかを考えることである。アドルノは、〈私は正しい認識に到達した〉と主張できるようになることが、認識活動の目標であるどころかむしろ用心すべき事態である、と言っているのだ。

かつて哲学と呼ばれたものを(今日)しようと決意する知識人にとって最もふさわしくないことは、議論をするさいに「……」自分が正しいと言い張ることである。「……」重要なのは、絶対に正しくて反論できない認識をもつことなどではまったくないだろう(このような認識は同語反復となることが避けられない)。そうではなく、重要なのは、正しさへの問いそのものがその認識に対して突きつけられる、そのような認識をもつことであろう。(478-9)

この発言は、伝達のために効率化された言語運用の拒絶という二つ目の論点にかかわる。なぜなら、自分の主張を論証によ

って提示するということもまた、どのような論証がよい論証であると見なされるかという論証についての価値基準を前提として成立する効率的な伝達にはかならないからである。それゆえ、自分が正しいと言い張ってはいけないというアドルノの考えを受け入れるならば、その帰結として、首尾一貫した論理を組み立てるための道具立てを自明視することははやできなくなる。それどころか、先に引用した発言のあとでアドルノは、こうした道具立ては放棄すべきだ、と主張する。

目指すのは、主張Theseと論証Argumentの区別を撤廃することである。こうした観点からすると、弁証法的に考えるということは、論証が主張のような激烈さを獲得し、主張がそれ自身のなかにたぐさんの根拠を含んでいる(ように考える)、ということだ。事柄そのもののなかにあるわけでもない橋渡しの概念・さまざまな接続・論理的な補助操作、対象の経験に満ち溢れているわけでもない二次的な推論、こういったものはすべて無くならなければならないだろう。哲学のテキストにおいては、あらゆる文が中心に対して等距離にあるべきだろう。(479)

主張と論証の区別を撤廃すること、これがアドルノの認識論

にかんする洞察から引き出される言語運用上の帰結である。このような考えは、ある主張を確かな根拠と妥当な推論によって導出する、あるいは予想される反論にあらかじめ答える、などの議論の組み立て方にかんする健全な考え方とはあからさまに対立する。そして、この対立ゆえに、こうした考えを確かな議論によってもっともらしくしようとすることはこの考えの内容そのものと矛盾することになる。すなわち、このアドルノの発言は、そこで提示されている考えの内容に基づいてそもそももっともらしく伝達することができないという点で、伝達に反対するという考えをいわば上演しているのである。このような叙述のしかたは、「思想の価値は、それが既知のものの連続性からどれだけ距離を取っているかで測られる」(F 50)と断言するアドルノからすれば、「思想の価値」を最大限に高めるものであろう。しかし、まさにそれゆえに、自らの考えを理路整然と効率よく伝えて相手に納得してもらおうべきだというような考え方からすれば無価値な考えであらう。

それゆえ、私は、このアドルノの考えを受け入れるべき一般的な理由があるなどとは主張しない。アドルノの考えと論理的思考についての通常の考えとは両立しえないものであり、私もまたアドルノの思考がそこから距離を取っている価値基準をすでにある程度は内面化してしまっているからである。しかし、

このアドルノの考えを受け入れるべきある特殊な理由があるのではないか、と考えることは私にとっても無意味なことではない。それは、私が言語運用についての特定の価値基準を内面化することによって何ができなくなったか、あるいは何を排除しているか、ということとを私自身が理解することにつながるからである。

この問題を考えるさいには、まず、主張と論証の区別によって何が可能になるのかを考えるのがよい。この問いに対する答えは、主張の正しさと論証の適切さを独立に評価できるようになる、というものである。なぜ両者を独立に評価することが望ましいとされるのだろうか。それは、私たちは一般に主張に対しては慣れ親しんだ感覚や好き嫌い、先入見によって(要するに、非合理的に)評価を下してしまいがちだが、論証の適切さはこうした非合理的要素が入り込む余地のない合理的手段(論理的道具立て)によって評価できる、とされるからである。

この解答には、第一哲学の本質と仮象の区別というモチーフがその抑圧的側面を強調するかたちで反復されている。なぜなら、この解答には、慣れ親しんだ感覚のもとで見られた主張のあり方は仮象であり、その正体(その主張がほんとうに正しいのかどうかということ)は感覚を排してその主張が導かれる論証の論理的構造を確かめることによってのみつきとめられる、

という含意があるからだ。この観点からみれば、ある主張を感覚的に評価する人は（「冷り女子」が言うように）自らの「無知」をさらけ出す「不用意極まりない」人だ、ということになる。すなわち、主張と論証の区別という議論上の規範を内面化することによって可能になるのは、議論から主観的要素を排除することだ、と言うことができる。

このように考えると、主張と論証の区別の撤廃というアドルノの提言は、主観性を非合理的要素として組み込む議論の運び方に抗して、そうした議論のあり方そのものの望ましさを問題にしようとするものとして主観性を考える、という目標を含意していることになる。このことは『ミニマ・モラリア』における次の発言に示されている。

思考する主観性とはまさに、上から他律的に設定された課題の範囲に組み入れられないものである。思考する主観性がまさにこの課題の範囲を克服することができるのは、思考する主観性それ自身がこの課題の範囲に属していないかぎりでのことであり、そしてそれゆえに、思考する主観性の存在は客観的に拘束力のある真理の前提なのである。(413)

「思考する主観性の存在は客観的に拘束力のある真理の前提な

のである」という発言は何を意味しているのだろうか。それは、真理とは「ある主観にとって」という限定がつけられることを前提とした相対的なものである、ということではない（なぜなら真理は「客観的に拘束力のある」ものとされているから）。また、あらゆる主観にとって絶対的に正しいものが真理とされているでもない（なぜなら思考する主観性の存在が真理の前提とされているから）。むしろ、ここで問題になっているのは、「ある主観にとって」や「あらゆる主観にとって」といった言い方が前提にしていること、すなわち、真偽を問えるような認識が個々の主観のあり方とは無関係に遂行され、その内容が同一のままほかの主観にも伝達されうるということだ。

このようなモデルに基づいた認識行為の理解は現実になされる認識とはかけ離れたものであろう。アドルノが言うように、「認識行為は、さまざまな偏見・直観・神経刺激・自己修正・先取り・誇張が編み合わされたもののなかでなされる」(430)のである。このような見解は哲学的でもない常識的なものであると思われるかもしれない。実際そうであると私も思う。アドルノの考えの重要性は、この見解そのものよりも、偏見や直観を非合理的要素として取り除いた後に残る認識について考えることが認識やその真理について哲学的に考えることだ、という態度そのものを疑った点にある。

先に個別的なものをめぐる弁証法的思考について確認したことがここでも再現される。弁証法的思考にとっては、偏見や直観はただ排除されるべき夾雑物なのではない。むしろ、弁証法的思考が目指しているのは、そうした偏見や直観がどのように編み合わされて個々の認識が生じているのかを探ることである。こうした細かい作業を飛び越して個々の認識が正しいかどうかを問題にすることはできない。「個別的なもののもとにとどまるときのテンポ・忍耐・根気には真理そのものがかかっている」(4.86)と、こう発言がこのような考えを端的に示している。

アドルノの洞察から引き出される言語運用上の帰結を受け入れるべき理由はこの点にある。すなわち、論理的な道具立てを廃棄せよというアドルノの提言は、首尾一貫したかたちで議論が進められるとき、そしてまたそうした議論によって自分の主張の正しさが認められたときに、そのような議論の進行のなかで中心的とされるものと周縁化されるものとの暗黙の序列を前景化するための視点を提供してくれるのである。このような前景化によって、ある主張が何の根拠からどのような推論によって導き出されるかという議論の見通しやすさ、透明性は損なわれることになる。しかし、それはまた同時に、偏見や直観が入

り混じった対象との不透明な関係に立ち返るということをも意味する。そして、アドルノが「対象との関係のために自らの論理的発生過程の完全な透明さを放棄する思想にはいつもなにかの果たすべき義務が残る」(4.91)と述べるように、この前景化は一度かぎりのものではなく議論が正しいものとして通用するそのつどの場面でなされるべきものである。

まとめよう。第一哲学の身振りに対する矯正策としての弁証法的思考は、個別的なものを包摂するのではなく個別的なもののもとにとどまるというかたちで本質と仮象の区別を保持する。このときの力点は、個別的なものについての正しい認識を獲得することよりもむしろ、正しいとされる認識を反省することにある。ここから私は、正しいとされる認識の正しさを支えている論理的道具立てを廃棄せよという言語運用にかんする帰結を引き出した。議論の進行のなかで周縁化されるものをもう一度位置づけなおしたいとき、あるいは議論がそこで論じられている事柄そのものから離れているように思われるとき、アドルノの考えは、議論のなかで用いられる言語のあり方を反省するきっかけを与えてくれる。

- (1) アドルノの全集 (*Gesammelte Schriften*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1970-1986) からの引用箇所については、巻数とページ数のみを指定する。ここのばあい、全集第五巻、三〇頁ということである。
- (2) 以下の認識論にかんする記述は、戸田山和久『知識の哲学』産業図書、二〇〇二年のとくに二三頁以下を参照した。
- (3) ミュラーによれば、アドルノがここで問題にしているのは、基礎づけをまったく主観性への還元によって成し遂げようとする方法と、そのような基礎づけが絶対的に確実でなければならぬという基礎づけについての考え方の二つの論点である。「アドルノが拒絶しているのは知識の基礎づけを求めること一般ではない。むしろ、アドルノの不信感には、社会的・歴史的内容のようなあらゆる「他律的な」要素を基礎づけから排除するという目的のもとで哲学的な基礎づけ形式をまったく排除することのみ回収するというところにむけられている。その一方で、アドルノの不信感には、最終的な絶対的確定性を要求する基礎づけの形式に(も)むけられてくる」(Ulrich Müller, *Erkenntnistheorie und Negative Metaphysik bei Adorno. Eine Philosophie der dritten Reflektion*, Frankfurt am Main: Athenäum, 1988, S. 103)。ユリフ・ネーラーのほかに私は同意する。
- (4) アドルノが「ほんとうの第一のものは何か」という問いそのものを拒絶しているということは次の発言に明らかである。「批判されるべきは絶対的に第一のものという概念そのものである。『……』第一のものを批判すると言っても、それは、真の第一のものを求めて狩りに出かけるというつもりではないのであるから、第一のものへの批判は『……』超越的存在を内在哲学的に基礎づけるということを、現象学に反するかたちで支持してもならない。問題なのはまさにこのような基礎づけの概念および正統化であり、究極の根拠が何であるかという主張が——その主張が内容的にはどれほど変わろうと——問題なのではない」(S. 15)。ちなみに、引用文中にある「基礎づけ Begründung」は認識論的正当化と同じ意味であり、「正統化 Legitimation」は認識論的正当化のことではなく、基礎づけが妥当であることを示す作業を指すと考えられる。
- (5) この段落の以下の引用はすべて、川上未映子『乳と卵』文藝春秋、二〇〇八年、四〇頁以下による。
- (6) ストーンは、カントの超越論的論理学からヘーゲルの弁証法的論理学を経てアドルノの否定弁証法にいたるラインを描いた論文 (Alison Stone, "Adorno and Logic," in: Deborah Cook (ed.), *Theodor Adorno: Key Concepts*, Stocksfield: Acumen, 2008, pp. 47-62) のなかで、「論証および推論の妥当な形式にわたる理論という意味での論理学はアドルノにはまったくない」(p. 47) と簡単に述べている。しかし、アドルノに欠けているのは論理学の改善や教育に役立つ積極的な見解であって、論理学そのものに対する否定的な発言は数多く見られる。本稿が主題にしているのはこの否定的な発言の含意である。
- (7) 議論のあり方そのものを問題にするということには、「単に議論を相対化すること以上の実質的な意味がある。なぜなら、それは、問題になっている議論がその議論上で話題になっている事柄そのものを適切に扱っているかどうかを吟味することに

なるからである。主張と論証の区別の撤廃を「アフォーリズムの確さと推論から導き出される判断の区別の撤廃」と解釈するフョットマン (Alexander Garcia Düttmann, *So ist es. Ein philosophischer Kommentar zu Adornos Minima Moralia*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2004, S. 47) の次の発言は私

の見解と重なる。「首尾一貫した論理による基礎づけ連関としての哲学、前進する運動の末にひとつの判断や理性的な主張へと到達するさまざまな論証の連関としての哲学は、事柄そのものに対して、すなわち、そのつど思考の中心にあるものに対して盲目的になる」(S. 42)。

(もり ひろのり／博士後期課程)